

日中交流に重点を置いた歴史授業の創造と実践

前天津日本人学校 教諭

群馬県伊勢崎市立第三中学校 教諭 小林 大悟

キーワード：中国の歴史教育，日中交流，中学校社会科

1. はじめに

日本にとって中国は最大の貿易相手国であり、地理的にも近く歴史的にも関係が深い。よって、両国間の関係が重要であることは言うまでもない。しかし、両国は歴史認識や尖閣諸島などの問題を抱え、良好な関係が築けているとは言えない。特に筆者が中国で過ごした4年間は、残念なことに日中国交正常化後、最も両国の関係が冷えきった状態にあった。一時の感情論に流されず、冷静に両国の古くからの交流に着目し、授業づくりを行っていくことは、今後の東アジア地域の発展を考える上で重要であると思われる。そこで筆者は、中国の教育関係者と交流しながら、日中交流に重点を置いた中学校の歴史授業（特に原始～中世史を中心）を複数提案し、実践してきた。本稿ではその一部を紹介したい。

2. 授業づくりの過程

(1) 中国の歴史教育における日中交流の扱いに関する調査

日中両国は互いの交流について、中学校でどのように教えているのだろうか。自国の歴史をどう教えるかということについてはその国の主権に関わる問題であり、他の国からの干渉を受ける余地はないとする意見もある。しかし、そのような頑な姿勢が関係をギクシャクさせ、未来志向の関係が築けずにいる実態もある。かつてドイツとフランスが共同で歴史教科書を作成したように、特に両国の接点が高い部分については歴史教育に関わる者同士が議論を交わし、共通認識を持つことが重要であると考えられる。そこで、筆者は中国の歴史教科書の分析、授業見学や教師との対談、生徒への聞き取り調査などを行い、その結果を参考にしながら日中交流に重点を置いた授業づくりを行ってきた。

① 教科書の分析

日本の歴史教科書で日中交流について初めて登場するのは、日本列島と大陸が陸続きだった旧石器時代からである。その後、縄文時代晩期に大陸から渡ってきた人々とともに稲作が伝えられ弥生時代になったこと、倭の奴国や邪馬台国が中国の王朝に朝貢していたこと、仏教や儒教、漢字の伝来、遣隋使、遣唐使、白村江の戦いなど、東アジアの歴史の流れの中で日本列島の歴史をとらえようとする姿勢が貫かれている。

では中国の歴史教科書はどうか。まず、教科書について日本と異なる点を整理しておく。中国では日本のように複数の教科書の中から一冊を採用するのではなく、教科書は一種類のみしかない。現在使用されている教科書は課程教材研究所歴史課程教材研究開発中心『中国歴史』（7年級上冊～8年級下冊、計4冊）『世界歴史』（9年級上下冊、計2冊）2005年版、人民教育出版社である。中国では7～9年次が日本の中学校にあたる。日本と同様に原始～現代までの通史で、7年次は原始～清朝半ば、8年次はアヘン戦争～現代までの中国史、9年次は原始～現代までの世界史で構成されている¹⁾。



左：中国の教科書 右：日本の教科書

中国の歴史教科書で日中交流が初めて登場するのは漢の時代で、光武帝が倭の奴国に金印を送った場面である。隋、唐の時代では、両国の密接な交流の様子が描かれ、日本の政治や文化が大きく変容したことが説明されている。「阿倍仲麻呂と鑑真」というテーマの特集も用意され、日本との密接な関係が強調されている。元末から明初にかけては倭寇の被害とそれと戦った戚継光の英雄記が記載されている²⁾。

日中交流の視点から両国の歴史教科書を比較すると、日本は東アジアの歴史の流れの中から日本の歴史をとらえようとしているため網羅的に日中交流を扱っているのに対し、中国は漢民族の王朝を中心にしており、周辺諸国との関係についてはトピック的に詳しく取り上げているため交流が強調されている部分とそうでない部分の温度差があるのが特徴である。

② 現地校の授業見学と教師との対談

2009年から天津市内の小中学校の授業を見学させていただいたり、日本語の授業を行わせていただいたりする機会を得た。麗苑小学校で4コマ、実験中学校で2コマ授業を見学させていただいたが、いずれも希望していた歴史授業ではなく、地理や英語などの教科に振り替えられた。そして、4回目の挑戦で2012年3月26日によく歴史の授業を見学することができた。協力していただいたのは周恩来元首相や温家宝元首相の出身校で知られる名門の南開大学附属中学校である。歴史専門の李先生が担当されている7年生のクラス、生徒数は約40名。教室には大型液晶モニターとパソコンが設置され、中国の標準的な学校よりも格段に設備が整っている印象を受けた。授業の形式は一斉授業で、先生が事前に要点を整理したものをモニターに提示しながら進められていた。



歴史授業の様子

歴史専門の李先生が担当されている7年生のクラス、生徒数は約40名。教室には大型液晶モニターとパソコンが設置され、中国の標準的な学校よりも格段に設備が整っている印象を受けた。授業の形式は一斉授業で、先生が事前に要点を整理したものをモニターに提示しながら進められていた。

見学させていただいた授業は、単元「多文化が融合した時代」の中の1コマで、宋とその他の民族が建設した国々の対立の構図と対立の結果、経済や文化が発達したことを理解させることをねらいとするものであった。これまで見てきた授業は、教科書の記述内容について先生が発問し、生徒が記述通りに答えるという一問一答式の授業が多かったが、李先生の授業はそれに加えてオリジナルな発問が用意されているのが特徴であった。授業の冒頭、「中国の三大発明は宋の時代のもので、中国の歴史上最も発展した時代と表す歴史家もいて、まさに商業革命が起こった時代だったと」（要約）と教科書にない歴史観を示し、生徒が興味深そうに話を聞いているのが印象的だった。「澶淵の盟を評価しなさい」という発問に対しては、生徒が教科書に記述されている模範解答を読み上げると、「教科書の考えもあるが、歴史の評価についてはいろいろな考えがあるということも理解する必要がある」ということもしっかりと付け加えていた。これまで見てきた授業や生徒への聞き取り調査から、中国では教科書を丸暗記する授業が一般的に行われてきているようだが、この授業がそれらとは一線を画すものであることは明らかであった。授業後の李先生との対談では、日中交流という視点で次のような意見を聞かせていただいた。

小林：今回、宋代の授業をリクエストさせていただいたのは、この時代の日中の交流に視点を当てて授業をつくってみたいと考えているからです。先生はこの時代の日中の交流について扱われたことはありますか？

李：日中ということではありませんが、三大発明の伝播や商人の活躍という意味では、世界とのつながりについて触れています。

小林：日本の教科書では平清盛の日宋貿易による宋銭の普及や禅僧などによりもたらされた最新の文化や建築技術などが紹介されていますが、それほど大きく取り上げられているわけではありません。私はもっと大きく取り上げてもよいのではないかと考えています。何かアドバイスをいただければ幸いです。

李：私もこの時代はとても面白い時代だと考えています。三大発明や商業革命が、多文化が融合する過程で生まれたこと、そして、それらが世界に広まっていったことなどは、交流史の中で扱えるとよい内容かと思えます。

小林：今度、秋にこの時代の日中の交流について扱う授業を予定しています。ぜひ、先生にご覧いただき、ご意見をいただきたいと思えます。

李：他の歴史の先生も誘って伺わせていただきます³。

小林：中国の歴史教科書では、特に遣唐使を中心に日中の交流が多く取り上げられています。私はこのように古くから両国が深く関わってきたことやそのことが現代の社会や文化の形成にどのようなつながっているか

などについて、子どもたちが追究していくような授業を両国で行うことで、今後、両国がさらにより関係が築けると思うのですが、先生はどう思われますか。

李：私もそう思います。現在は教科書の内容が大変多く、進学試験との絡みもあり、どうしても知識を詰め込むような授業になりがちです。しかし、今後、内容を減らし、あるテーマについて追究させる場面を増やしていこうとする動きもあります。このことが具体化すれば、私も日中の交流について子どもたちに追究させるような授業を行ってみたいと思います。

(2) 日中交流に重点を置いた授業の提案

日本人学校の児童・生徒たちと普段接し、聞き取り調査などを行う中で、彼らの中国や中国人に対する見方や考え方の実態が次のように明らかになった。まず、中国という国に対して好意を抱いている人は非常に少ないということ。これは、昨今の政治的な問題や反日運動の展開、環境・衛生問題、著作権に関する問題などが起因している。また、中国人に対する評価は二分する結果となった。自分勝手や大声で話す、どこでもゴミを捨てるなどといった理由から好感が持てない人がある。一方で、子ども好きで親切、細かいことを気にしない、日本に文化や風習が近いところがあるなどといった理由から好感を持っている人も少なくない。報道だけでは知り得ない中国の実態に触れている彼らは、より広い視野から中国をとらえていることがわかる。そこで、偏見をなくし、さらに広い視野から中国との関係を見つめ直せるように、次の点を意識し授業づくりを行うこととした。

- I. 現代日本や日本人の形成に中国や朝鮮が大きく関わっていることを理解させる。
- II. 交流の背景にある東アジア全体の歴史の流れを理解させる。
- III. 幅広い年代を網羅しつつ、トピック的に深く掘り下げられる題材を設定する。

3. 授業の実践

4年間の実践概要を以下にまとめた。太枠は李先生との対談により考案した授業である。

時代	題 材	概 要
旧石器～弥生	現代日本人のルーツを探れ	縄文人と渡来人との混血により現代日本人が誕生し、大陸からは稲作、金属、土木技術などが伝えられた。日中の古人骨の分析などから追究。
古墳	鉄をめぐる攻防	『魏史』の記述をもとに、当時の中国、朝鮮、日本による鉄の獲得に向けての攻防を追究。
飛鳥	大運河の建設と遣隋使	聖徳太子はなぜ隋の煬帝に失礼な手紙を送ったのか。遣隋使はどのようなルートを通ったかを追究。
奈良	シルクロードの終着駅、正倉院	正倉院の宝物はどこからやってきたか。また、どういった国々の文化の影響を受けているかについて、シルクロード周辺の国々の動向を踏まえて追究。
平安	唐の衰退と東アジアの変貌	「菅原道真はなぜ遣唐使を廃止したのか？」というテーマで、これまで遣唐使により受けた恩恵や東アジア情勢の変化と文化への影響などを追究。
平安～室町	日本の伝統文化とは何か？ 国交がない時代の日中民間交流の影響	日本庭園や水墨画、茶の湯などは日本の伝統文化と考えられているものの、実は鎌倉時代に中国から伝えられた禅宗の影響を強く受けるものである。日中の国交がないこの時代の禅僧の役割を追究。
鎌倉	モンゴル帝国と武家政権初の外交	平清盛は日宋貿易など中国との外交に力を入れた。それに比べ鎌倉幕府は外交経験が浅く、モンゴルとの外交で試練を迎える。外交の視点で両者を比較。
室町	迎賓館金閣に懸ける日本国王足利義満の決意	側近の反対を押し切り、明との朝貢貿易に踏み切った足利義満が目指した外交と交易、そして、金閣に秘められた外交上の策略について追究。

4. おわりに

授業後のアンケート調査では、多くの生徒が自分自身や日本が中国と深く関わっていることをこれまで以上に強く意識できるようになったと答えている。また、多くの生徒が中国に親近感を抱き、未来志向の関係を築きたいと考えるようになった。今回の試みははじめての一步かもしれないが、日中双方でこのような実践を継続していく意義を強く感じた。

<注および参考文献>

- 1 中国の教科書ではアヘン戦争以前を古代、以降を近代としている。明清時代は同時代として扱われているため、日本の中世とは必ずしも一致しない。
 - 2 中国の教科書に関する記述は、原本や課程教材研究所・総合文科課程教材研究開発中心『中国の歴史と社会 中国中学校新設歴史教科書』明石書店、2009. や夏坂真澄・稲葉雅人『日本と中国「歴史の接点」を考える—教科書にさぐる歴史認識—』角川書店、2006. を参考に要点を抽出。
 - 3 尖閣諸島国有化に伴う日中関係の悪化により実現せず。
- ・『世界の教科書シリーズ5 入門 中国の歴史 中国中学校歴史教科書』明石書店、2001.
 - ・齊藤一晴『中国歴史教科書と東アジア歴史対話』花伝社、2008.
 - ・劉 傑『国境を越える歴史認識 日中対話の試み』東京大学出版会、2006.
 - ・諏訪哲郎・大智 新・斎藤利彦『沸騰する中国の教育改革』東方書店、2008.
 - ・西村克仁『日本は中国でどう教えられているか』平凡社、2007.